

公共事業に対する市民意識構造分析 ―公共事業における無駄とは何か―

北海道大学 学生会員 戸田 一志

北海道大学 正会員 高野 伸栄

1. 本研究の背景と目的

20世紀末から現在にかけて、一部の公共事業に対して無駄だと言われることが多くなり、最近は事業仕分けが注目されるようになり市民からの関心も強くなっている。しかし、無駄という言葉は事業や使う人によって意味は一定ではないと思われるが、そのことに対して議論が殆んどなされていない。そのため無駄という言葉が何を指すものかを研究するべきと考える。

本研究の目的は、市民が公共事業に対して無駄と判断する基準とその基準の個人差異を決定する要因を明らかにすることである。

2. 無駄の定義

無駄という言葉は「益のないもの、役に立たないもの」という意味がある。しかし、公共事業は何らかの効果が期待されて行われるもので、無駄と呼ばれている事業の中には、一部ではあるが効果があるのも含まれている。そこで、無駄の英訳「waste」から「不経済・浪費」という意味と、同じく「useless」から「不要、無益」という意味の2つから、公共事業の無駄を本研究では捉えて進めていく。

3. アンケート調査

「行政や公共事業に対する意識アンケート」をインターネットで行った。概要は表1の通りである。この意識調査は「文化会館」「ダム」「高速道路」「公園」の4種類の事業を用いて各5つの条件を作る。各事業は表2から適切な5つの要素を選択し構成させる。1つの条件につき、1つの要素を悪条件として設定する。構成する要素は表3の通りである。これは、大きく2種類によって分かれており、1つは「効果」や「利用者」といった公共事業によって起きる影響を表した要素、もう一つは「建設費」や「建設期間」等、公共事業を行うために消費を表した要素である。そして、条件別に公共事業として無駄かどうか等を聞き、行政や公共事業に対する意識を調べた。

4. 無駄評価の分析

図1を見ると、合計で66%の市民が、5要素のうち1要素の悪条件で無駄だと感じる。事業の種類による違いで無駄かどうかの判断に大きな差はない。

図2によると、「利用者」や「効果」の要素が悪条件のときは

表1 意識調査の概要

項目	内容
対象	20代100人、30～40代100人、50代100人、合計300人
日程	2011年 1月
方式	インターネット調査
質問内容	I 個人属性(プロフィール、テレビや新聞に関して、等)
	II 行政、公共事業全般に関する意識調査
	III 4種類の事業に対する無駄に関する意識調査
	IV フリーアンサー(具体的な事業、行政などへの意見)

表2 無駄を判断する時に用いる要素

項目	項目内容
建設費	—
維持費	—
利用者数	—
効果	その事業によって期待できる効果
周囲への影響	環境や地域へ起こる影響
設備の適切さ	設置されている設備は適切か
建設期間	—

表3 各事業の質問に用いた要素一覧

	建設費	維持費	効果	利用者	設備	影響	建設期間
文化会館	○	○		○	○	○	
ダム事業	○	○	○			○	○
高速道路	○	○	○	○			○
公園	○	○	○	○			

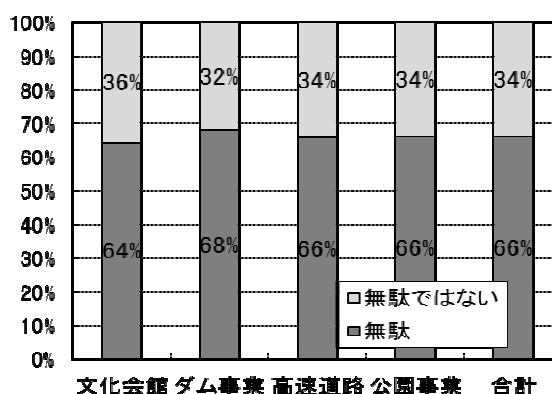


図1 各事業の無駄かどうかの割合

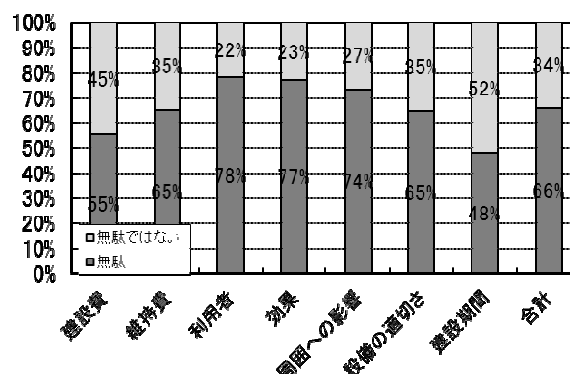


図2 各要素における無駄かどうかの割合

キーワード 公共事業、無駄、市民意識

連絡先 〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目 北海道大学 工学院 北方圏環境政策専攻 建設管理工学

無駄と判断する割合が高く、「建設費」や「維持費」といった費用よりも重要だという結果が出た。「設備の適切さ」は費用と同じぐらい重要である。また、「周囲への影響」が悪い条件の公共事業も無駄だという人は多い。そして、「建設費」と「維持費」では「維持費」が重視される。また、「建設期間」はほかの要素よりも大きく軽視されている。このことから、市民にとって重要なのが公共事業として期待される効果や付与される影響であり、施工期間における費用や長さといった悪条件はあまり重視されていないことが分かる。

5. 調査結果の分散分析での評価

ここでは事業別に各条件を比較した時のまとめを行う。各条件で1番悪かった要素を5点、2番目を4点、3番目を3点、4番目を2点、5番目を1点とし、1人辺りの平均順位得点を出す。その点数を用いて各事業で分散分析を行った。

結果は表4から表7の通りである。全体的な傾向として「利用者」が一番大切だとされ、「効果」は事業によって重要さが変わるが、他の要素よりも重視される傾向にある。また、「維持費」の分散が小さく、「建設費」は分散が大きい傾向にあった。このことから、人によって「建設費」に対する意見の差が大きいことが分かる。そして、「周囲への影響」は条件別で見た時よりも、他の要素と比較した時に重要度が低くなっている。

6. 数量化Ⅰ類による分析

個人のプロフィールや経験、知識等で無駄に対する基準が変わるのかどうかを調べるために、数量化Ⅰ類で分析した。外的基準は質問3で行った4種類の事業にある5条件、合計20条件において「無駄ではない」と答えた回数を20で割ったものを採用する。アイテムは、「住んでいる地方」、「住んでいる都市の人口」、「購読している新聞」、「テレビの視聴時間」、「大きな災害時の行政の対応」、「公共事業に対する印象」の6つを用いた。この分析の結果は表8の通りである。ここで注目したのは、表8において範囲の値が大きかった「住んでいる地方」、「テレビの視聴時間」と「公共事業への印象」の3つである。特に「公共事業への印象」が一番大きい。この3つが公共事業を判断する上で大きな基準になっていることが分かる。

カテゴリースコアの結果は表9の通りである。カテゴリースコアの値がマイナス側であれば、公共事業に対して無駄だと答えている割合が多いことを示している。この表から、都市圏から遠い所に住んでいる人、特に東北や北海道に住んでいる人、また、テレビを毎日見ているがその時間が2時間未満の人、これは男性や仕事を持っている人の割合が多い、そして、公共事業に対して良い印象を持っていれば持っているほど、公共事業に対して無駄と答える割合が小さかった。

表4 文化会館事業における平均順位得点

グループ	平均	分散
建設費	3.04	2.75
維持費	3.19	1.39
利用者	3.26	1.52
適切さ	2.73	1.72
周囲への影響	2.77	2.42

表5 ダム事業における平均順位得点

グループ	平均	分散
建設費	3.21	2.38
維持費	3.21	1.34
効果	3.62	1.36
周囲への影響	3.08	1.70
建設期間	1.84	1.52

表6 高速道路事業における平均順位得点

グループ	平均	分散
建設費	3.04	2.38
維持費	3.21	1.27
利用者	3.67	1.47
効果(利便性)	3.20	1.57
建設期間	1.89	1.58

表7 公園事業における平均順位得点

グループ	平均	分散
建設費	3.06	2.60
維持費	3.21	1.38
利用者	3.48	1.58
効果(満足度)	2.71	1.77
設備	2.54	2.13

表8 数量化Ⅰ類の結果

アイテム	範囲	偏相関係数
X(1): 地方	0.16208	0.20248
X(2): 人口	0.1044	0.1711
X(3): 購読する新聞	0.1285	0.20754
X(4): テレビの視聴時間	0.17709	0.20871
X(5): 災害時の対応	0.13918	0.18012
X(6): 公共事業の印象	0.26008	0.27636
サンプル数:294		
重相関係数:0.486		寄与率:0.237

表9 3つのアイテムのカテゴリースコア

アイテム	カテゴリー	個数	カテゴリースコア
X(1): 地方	1 東北・北海道	28	0.12
	2 関東	123	-0.04
	3 中部	47	0.04
	4 近畿	58	-0.01
	5 中国以西	38	0.01
X(4): テレビの視聴時間	1 5時間以上	52	-0.01
	2 2～5時間	123	-0.01
	3 2時間未満	91	0.06
	4 ほとんど見ない	28	-0.12
X(6): 公共事業の印象	1 大変良い	5	0.19
	2 良い	101	0.08
	3 悪い	146	-0.04
	4 大変悪い	42	-0.07

7. おわりに

市民が考える公共事業に対する無駄について意識調査し、判断基準や個人差異について分析した。アンケート調査より、特に「利用者数」が無駄だと考える大きな要因であり、公共事業がもたらす効果や影響といった「useless」の意味合いが強い要素が費用よりも重視されていることが分かる。

判断基準の個人差異は「公共事業への印象」、「住んでいる地方」、「テレビの視聴時間」によって決まり、その中でも「公共事業への意識」は大きな要因だと確認できた。